

「京都式えらへるデイサービス」の2回目である。前号でもお伝えしたように、京都府高齢者支援課の船越理志主査によれば、京都式独自の実施基準はあるが、それはあくまでも1つの目安であり、高齢者の意欲を引き出すことがまずは最大の目標であるという。

筆者は、京都市内のデイサービス「本能」と、京都府の北、宮津市にある、天橋の郷へ「社会福祉法人北星会」の2つを見学させてもらった。基本とする考え方の大枠は共通していたし、それぞれにお年寄りたちの活気あふれる活動を見ることができたけれども、ポイントとする点が微妙に異なっているところが興味深く感じられた。

まずは本能デイサービスセンターから。本能は京都市が設置し、社会福祉法人京都福祉サービス協会が指定を受けて管理・運営にあちついている高齢者福祉施設である。デイサービス35名、ユニット型特別養護老人ホーム90名、ユニット型ショートステイ(10名)の他に、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所などを併設し、運営している。

レクリエーションは、俳句班「物づくり班」「運動班」「音楽班」などの4班に分かれ、3カ月ほど継続される。見学したのは、グラウンドゴルフ、調理(ケーキづくり)、ボードゲーム、音楽だった

が、筆者にはその決め方がユニークであった。各班にリーダーがあり、利用者それぞれの意見を聞き、リーダーによるユニットレク会議で内容を決め、希望者を募ってメンバーを調整し決定する。いわば自主運営というスタイルにできるだけ近づけようとしているのであった。それがこのデイサービスの大きな特徴のように思えた。

2つ目は、スタッフたちの積極的な働きかけ、語りかけであり、さらに注意して見ていると、そこには2つの特徴があった。1つはネガティブな言葉、否定的な言葉が皆無であること。もう1つは、お年寄りたちの過去の記憶につながる問いかけや話題の提出を心掛けてるように感じられたことである(このことは、当然、回想的な効果を意図しているのだろう。ちなみに音楽グループでは、歌うことの合間に、記憶に訴える回想的な対話がさかんに繰り返げられていた)。

あるいは、ボードゲーム。サイコロを振ってコマを進め、人生のあれこれの出来事に遭遇しながら「上がり」を目指すゲームである。進学とか貯蓄するかとか、結婚といった「コマ」が出るたびに、「結婚したときのこと、覚えていてはりますか」という問いかけで、昔話に盛り上がりたりするという具合である。あるいは、「Aさん、サラリーマンになるか、一発勝負に出るか、どうされます?」「スタッフ、「サラリーマンですわ」利用者、「ああ、人生、守りに入ってはりますね」(スタッフ)、「はい、私の人生はずっと守りだった

2つのデイサービスの

取り組みから

本能デイサービスセンター(京都府京都市)と特別養護老人ホーム天橋の郷(京都府宮津市)より — その2

佐藤 幹夫

からな(笑)利用者)といった会話が交わされたりする。

こうしたやり取りは、高齢者介護では普通のことなのかもしれないが、主任生活相談員の森賢一氏への取材インタビューで認知症が話題になったとき、なるほどと合点した。当初、グループの規模を8名くらいにしようとして、認知症の重度の人が目立ってしまうのではないかと危惧していたという。しかしそうではないことに気づいた。目立たせてしまうのは、むしろ職員の側の問題なのではないか。「お昼ごはんは、何を、食べましたか」と質問してしまうと、利用者にとっては、忘れました「なんだっけなあ」といった答えになる。つまりスタッフが、年寄りの短期記憶を試しているだけの質問になってしまう。当然、本人のプライドは傷つけられるだろう。だから、お昼ご飯に、今日は太刀魚が出ましたけれども、おいしかったですか」という聞き方をすれば、食べたことを忘れていても、おいしかったよ」と答えることができる。「忘れた、できない」と言わせてしまう問い方ではなく、答えることのできる問いをする。これは認知症ケアの基本だと思つたのです。だから利用者さんのなかで、認知症の方を目立たせてしまっているのは、じつは職員の対応のせいではないか。ではどんな聞き方をすればよいのか。そうぼくらは考えてきたのです」

まったく指摘の通りだと思う。「京都式えらへ

るデイサービス」というのは、1つの「形」である。本能ではその「形」を利用しながら、認知症ケアのあり方や方法に、言い換えるなら高齢者に対するていねいなかわり、元気が少しでも出るようなかわりとはどのようなものが、スタッフ全員で模索しているように見えた。

森さんはまた、最終的には、利用者ができる限り自分たちで内容を決めて、自分たちで楽しめるようになってほしい。そしてできれば、家庭でも継続して取り組んでくれるようになってほしい」とも言う。先ほども少し触れたように、利用者自身による自主運営である。高齢者介護における「自立」の1つのあり方を述べているのだからと思つた。

”

宮津市天橋の郷より

“

一方、天橋の郷では、施設長である北条千恵子氏が、このデイサービスはアミューズメントパークです、と強調していたことがとても印象的だった。アミューズメントパーク、つまり楽しさのぎゅしゅりと詰まった施設である、というほどの意味だろう。そしてまさにその通りだと感じられた。

天橋の郷は特別養護老人ホーム(7ユニット、定員70名)、ショートステイ(2ユニット、定員20名)の高齢者施設である。

デイサービスのレクリエーションは午前90分、

午後90分。利用者は40名で、介護予防グループが1つ(要支援1)2の利用者が対象で、ホールでのカラオケや屋外でのグランドゴルフなど。要介護1~5の利用者は、さくら工房(編み物、縫物などの創作活動)、「遊々くらぶ」(園芸、軽運動、カラオケ、テレビゲームなど)と大別され、さらに10名ほどのグループに分かれての活動となる。午後は介護枠を外しての小グループ活動となる(午前中とは活動内容を変える)。

筆者が見学した創作活動は手芸や織物・編み物など。作品の出来具合は本格的で、ストラップになるフクロウの小物やモチーフの膝掛けなど、販売に耐えうる作品が並んでいた。近隣のイベントや京都府主催のフェスティバルといった機会をみては出品し、フクロウの小物などは注文が多く、制作が追いつけないほど好評を得ているという。

筆者には、片麻痺の利用者が帽子やマフラーを自力で編む補助員が印象深く目に留まった。これはスタッフの制作だというが、この補助員のおかげで自力での編み物が可能となった。そして出来上がった作品をお孫さんにプレゼントしたところ、とても喜ばれ、生活全体が明るくなったという。あまり話さない人だったが、表情が豊かになり、いまでは新しい利用者に積極的にアドバイスを送るまでになっているという。

またゲーム班はテレビゲームでのゴルフをやっていたが、せうかくの機会なので、ボウリング

ゲームも見せていただくこととなった。備え付けのボールを持ち、放る動作をするとピンが倒れ、点数が表示される。高得点のときには周囲から歓声が湧くし、失敗したときには温かい笑いが起こる。高得点者のスコアが貼り出されており、和やかな雰囲気ながらも、誰もが集中している。ゲーム機器は、高齢者には好まれないのではないかと意見も出たが、始めてみると予想に反し、いまではスタッフよりも利用者の方が熱中するほどだという。

施設内の地域交流ホールで活動していたのは、介護予防グループ。発表会を控えているということで、自作の歌とハンドベルの練習に余念がなかった。歌の作詞は利用者である船野和雄さん、作曲がスタッフの武田大祐さん。歌のタイトルは「天橋口マン紀行」。その名のとおりご当地ソングである。グループのメンバーは、歌詞のイメージをしっかりとつかむために、宮津から天橋立まで電車に乗って出かける体験もしてきたという(聞く)、多くの利用者が、電車などで外出する機会がなくなっているという。本能でも外出での活動に取り組んでいたが、目的をもって外出するということは認知症の予防にあって、とても重要な取り組みなのではないかと思う)。

天橋の郷でも1つの活動が3カ月ほど続いたのだが、北条施設長は、ここでの活動が家庭でも継続されることの重要性を強調した。高齢者



デイサービス本能のケーキ班の様子。



こちらは、本能のゲーム班。皆さん、和やかに会話をしながら楽しんでおられた。

自身が、1週間後のデイサービスの日まで楽しみや目的をつなぐことができるようになり、自宅でも自分から取り組むなど、生活全体が前向きになっていく。そのことは職員にとって、グループ全体への準備や労力の負担軽減へとつながることになり、ひいては一人ひとりに対するより細かなケアが可能になっていくという。形は小グループを採っていますが、基本は個別ケアですよと繰り返した。

もう一つ、北条施設長が強調していたことがあった。高齢者になっても認知症になっても、可能性は決してゼロではない。今を生きているということも大事に考えなくてはならないから、懐かしいもの、古いものだけを取り入れるのではなく、新しいもの、現在流行しているものにもときには触れてみる必要がある。認知症の人でも、決して新しいことに対する関心が失われているわけではないという。

なぜ施設長がこうした強調をするか。筆者があるお年寄りに、「ここではお友達は多いのですかと尋ねると、「いっぱいおるよ。名前は覚えとらんけど、顔はよう覚えとる」と笑いながら答えてくれた。穏やかに活動を楽しんでおられるけれども、聞けば、落ち着いて活動に集中しているお年寄りたちの多くが、認知症であるとのことだった。

認知症と言えば問題行動ばかりがクローズアップされる。しかし日常生活のすべてにおい

て身辺処理行動ができなくなっているわけではない。安心でき、楽しく、積極的に1日を過ごすことができれば、問題行動などはほとんど見られないし、場合によってはできることが増えていく。たとえ認知症になっても、こんなふうにして1日を楽しむことが十分に可能なのだということをお教えされたのだ。

最期に蛇足を一つ。2日間にわたって、京都市えらべるデイサービスの現場を見学させていただいた。様々なバリケーションの活動が用意されていたが、大きく次のような目的をもっているのではないかと思われた。

身体面への働きかけ、記憶や認知面への働きかけ、交流やコミュニケーションへの働きかけ、楽しさや意欲といった情動面への働きかけ この4点のねらいが、1日のレク活動のなかでどうバランスよく配分されているか。4つの観点から1日の過ごし方を振り返ってみると、といった分析も可能かもしれない、と感じられたのだ。

「京都市えらべるデイサービス」のさらなる展開を期待したいと思う。

さとう・みきお（フリージャーナリスト）

養護学校教員を経て平成13年からフリージャーナリストに。著書に『ハンディキヤン論』（洋泉社・新書）、『自閉症裁判』（洋泉社）、『裁かれた罪 裁かれなかった』（17歳の自閉症裁判）（岩波書店）、『自閉症』の子と私たち（考えてきたこと）（洋泉社）。近著に本連載が基となった。ルガ、高齢者医療 地域で支えるために（岩波新書）がある。共著に『刑法三九条は削除せよ！ 是非か。少年犯罪厳罰化 私はどう考える』（いずれも洋泉社・新書）など。



天橋の郷で作られた携帯ストラップにもなるフクロウの小物。一つひとつの出来具合はなかなかのものだ。



ボウリングゲームを楽しむ天橋の郷の皆さん。楽しさの中にも試合のほどよい緊張感が漂う。